

平等院鳳凰堂仏後壁前面画の主題 — 「釈迦八相」としての解釈の可能性 —

東海学園大学 渡辺 里志

平等院鳳凰堂仏後壁前面画は、高々とそびえる山岳を背景に、向かって左下に回廊に囲まれた翼廊のある楼閣が大きく描かれ、楼閣の中央で仏陀と男性が対面し、前庭で盛大な舞樂が営まれている。右上には、中央に仏陀が坐す楼閣があり、その前方には蓮池の上に舞台が備えられ奏樂舞踊する様が描かれる。こうした図様は、他に例のない極めて特殊な図様であり、その主題もいまだ確定したとは言い切れない状態といえる。この主題については、明応九年（1500）の奥書のある三条西実隆筆『平等院勸進状』に「釈迦八相」と記されているとおり、古くから釈迦八相と伝えられていたことはよく知られているが、これまでの多くの研究に於いてはこの釈迦八相説は否定されてきている。この主題をめぐっては、これまで小森彦次氏、戸部隆吉氏、津田敬武氏、源豊宗氏、秋山光和氏、大原嘉豊氏など多くの研究者によりさまざまな説が出されているが、本発表ではこれまで等閑視されてきた「釈迦八相」という観点から主題を再検討し、その伝承が間違っただけのものではないことを確認し、古くから「釈迦八相」と伝えられてきた意義を見直してみたい。

絵画の主題を再検討するためには、まず絵画の細部を正確に把握することが必要であるが、残念ながら絵の具の剥落が著しく現在までに失われた部分も少なくない。幸い、過去に描かれた模本（江戸時代：東京国立博物館・田中訥言筆本、京都市立芸術大学芸術資料館・土佐派本、明治時代：東京大学工学部建築学科、東京国立博物館、西尾市岩瀬文庫など）が伝わっており、これらの模本に助けられる部分もかなりある。主題を解釈するために最も重要なポイントは、左下の楼閣内に坐す仏陀が誰であるかということにつきよう。この仏陀は、模本類をもとにして図像的特徴を確認すると、釈尊と解釈することが最も適当である。そうすると、背景の山岳も靈鷲山となる可能性が高く、楼閣は釈尊が滞在した精舎と解釈できる。すなわち、左下の場面は多数の貴族を引きつれた大王が、舞樂を催して釈尊を賛嘆供養し対面するところとなる。右上の楼閣はまさに阿弥陀浄土を表したもので、大王と対面している釈尊が阿弥陀浄土を現出させたところと解釈できる。

こうした絵画表現を釈尊の伝説の中から渉猟してみると、大王として最も可能性が高い人物は頻婆沙羅王あるいはその子阿闍世王を挙げることができる。この父子は韋提希夫人とともに『観無量寿経』に王舎城の悲劇の中心人物として登場する。特に阿闍世は殺父という五逆の極悪罪を犯したが、晩年は釈尊に帰依し救済されたことがさまざまな仏典に伝えられている。阿闍世王は浄土経典と深いつながりがあり、釈尊と阿弥陀を結びつけるもっともふさわしい人物といえる。平等院鳳凰堂仏後壁前面画の主題が釈尊在世中の事跡となれば、古来「釈迦八相」と伝えられてきた理由も自然の成り行きと理解できる。